



〈総合科目〉

学生の問題意識開発のために

—— 一般教育総合科目「女性論」の試みから ——

稲賀 繁美*

はじめに

日本の大学、それも教養課程における授業はおおきく変質をとげようとしている。制度の面からみればそれは旧来の一般教育と専門教育の区分が撤廃されたことにも象徴されていよう。だが問題はひとりカリキュラムの項目を名目的に刷新し、履修単位数の細部を変更すればそれで解決されるようなものではない。戦後40年以上にわたっていくつかの方向転換はあったものの、左右の対立という図式に安住することによってかえって維持され、強化されてきた教育観は、ふと気付くとその狭隘なる問題意識ゆえにもはや今日の国際的な社会情勢のなかで、まったくといってよいほどの外れなものになってきている。将来の21世紀の世界、そして東アジアの動向を視野にいれ、そのなかで生きて行くことになる現代の日本の大学生に今なにを教え、いかなる問題意識を抱かせる必要があるのか、いかなる視野を植え付けるべきなのか、といった反省すら、教育界と称する専門家集団のなかでは、正面から論じられることは少なく、受験体制へのテクノクラートの対応か、はたまた既製の政治的問題へとすり替えられることで、蔑ろにされてきたきらいすらある。

例えばここで「日本の大学生」というのは、日本人学生のみならず、海外からの留学生をも同等に扱うという前提に立つために選んだ用語である。だが、この前提を当然のものとして教育を組織している大学は日本では何校と存在すまい。universityなる理念の根本にあるはずのこの国境を越えた国際性すら、日本では未発達・未成熟なままである。明治のナショナリズム

ムに裏打ちされた官立官吏養成学校が、10年をへずして外国人教師を排除し、日本語による高等教育を実現し、それが大正デモクラシー式の屈曲した欧米礼賛教養主義を経由したあと、昭和の敗戦国におけるアメリカ合衆国主導の民主教育の上意下達の実験場へと変貌してきたという歴史的経緯に照らせば、日本の大学の国際的閉鎖性もまたやむおえないものだったろう。だが大学紛争の体験が過去の追憶へと変質し、当時の管理者側がすでに大学を去り、かわってかつての異議申し立て世代が立場を変えて今や日本を支える中堅となり、しかもその子供の世代が大学生となるに至った現在、日本という国は、「国際化」などという戦後50年あいもかわらぬ掛け声にもかかわらず、かえって急速に国外の動向から興味を失い、政治はもちろんのこととして、経済や金融の分野においても、国際情勢から急速に取り残され、物流のみならず情報の流通経路に至るまで、ますます自閉した価値観の殻のなかに閉じこもりつつあるかのようだ。

なかでも極端なのが知的流通の閉鎖性だろう。1980年代以降の外国人留学生の急増は、アジアにおける日本の位置の変化に対応する顕著な傾向であろう。だが、この貴重な歴史的経験すら日本の大学は主体的に受け止めることはできぬままに、後手後手の対症療法に回って、将来への展望もなくやり過ごしてきた。今後の東アジアにおける国際的人的交流の基礎を築く機会をみすみす取り逃がしたばかりか、もはや数年後には東アジアにおける求心力すら急速に失って、日本一国の国民のみしか視野にいれてこなかった教育政策が取り返しのつかない失敗をここ20年そうと気付くこともなく犯し続けてきたことも明白となるだろう。それはとりわけ受験過熱

* 三重大学人文学部文化学科

賛否両論にわたる関係者全員の共犯的自家中毒と感覚麻痺によって、日本以外の諸国との相互依存のうえに成り立つこの島国の立地条件、政治地理的特性に目を瞑ってきたことの抖として、おいおい跳ね返ってくることだろう。

大学初期教育に求められる課題は多く、またひとり大学だけの努力で解決するにはあまりに重大で根の深い歴史的、社会的制約を伴っている。日本の社会がここ20年以上にわたって、世代の意識差という隠れ蓑の下で無意識のままに累積してきた矛盾の露呈する結節点が、まさに大学の教養課程にある。かたや高校までの（事実上の）義務教育における極端なまでの知育偏重と、かたや大学院強化を構想するいくつかのcenter of excellenceが主導する先端の研究者養成の要請との（とうてい4-9年の学習では埋め得ない）膨大な落差、さらには大学教育は無意味だし何も習わずに入社してくれたほうが研修で潰しが効きやすいとする日本の企業意識と、そうした風潮に安住したがために、日本でこそ推奨され容認されながら、いまや日本以外のどの社会にもまったく通用しない日本の大学卒業生の甘えと無能力。さらにはこの傾向にいつそうの拍車をかける行政上のさまざまな規制や制限。

こうした齟齬のなかで、日本の大学教育、それも教養課程の歴史的失敗を宣告するのはあまりに容易だろう。だが教養課程を解体したところでこの問題の解決とならないこともまた明らかだ。そこにこの社会の矛盾が集約されている以上、そこから目を背けたり、問題をすり替えたりすることなく、この病巣の中心である大学での教育の現場へと測鉛を降ろし、問題点を具体的に掘り起こし、それを出発点として、日本の学校制度、社会制度全般への、地球的な——いささか手垢のついた表現だが、これは利己的な自己保身ではないという意味だ——視野にたった反省を促す努力を、個々の教員はけっして怠ってはならないだろう。もしこの努力を放棄するならば、それは専門分野の研究者か、国家からサラリーを貰う宮仕え会社員か、そこそこの三文文士ではありえても、もはや教員た

る資格には悖るからである。

I 「女性論」における試み — 昨年の経緯

「女性論」という科目は、歴史的にみて、これも欧米の潮流に影響されて導入された側面を否定できないものの、以上のような日本社会の特性への批判的考察の切り口として最近急速にその重要性をましてきた。その隆盛については、(1)学生側からみれば高校までの教育課程ではほぼ不問に付された問題であり、また文化系の学部では女子学生の比率が半分に匹敵しつつあること、(2)社会進出をはたした女性にとってみれば、女性の存在を問い直す学問的営みにとって大学という舞台が、みずからの市民権を確立しつつ自己正当化の言説を紡ぐうえで特権的な環境となったこと、(3)また性を異にする自称知識人的存在にとっても、みずからの学問の政治的な正しさを印象づけるうえで女性論の言説を排除するのが得策ではなかったこと、(4)しかし法律的にもジャーナリズムの倫理規定などにおいても依然として女性が特殊な扱いを受けていることに反省を促す運動がみずからを「女性論」として特権化することには、遂行途上の政治運動ならではの跛行性(これも使用禁止語だろうか)のあること、といった背景の分析はここでは控えることにする。

三重大学においても、おおくの日本の大学の例に漏れず、「女性論」は学内外の多数の講師がオムニバス形式で参加する「総合科目」の一環として実施されてきているが、筆者は昨年度も北アフリカから西アフリカに広がる「女子割礼」という社会習慣とそれに対する現地の人々の意識や医療ケースワーカーの取り組み、この社会習慣を女性蔑視として糾弾する欧米 N. G. O. の抗議宣言などを批判的に考察する話題を提供した。この授業の意図、伝達した情報の内容と、学生たちの反応を詳しく分析した結果は、『異文化の理解と誤解 — 教育方法の学際的・総合的研究』（三重大学人文学部文化学科）として1993年度学内特別研究の枠で報告している。

講師の側としての最低限の問題提起は以下のようなことであった。つまり果たして特定の社会の風習を外部の価値観で一方向的に「女性蔑視」と規定できるのか。その態度こそその社会にたいする無意識の「蔑視」なのではないか。しかしだからといって我々は手をこまねいていてよいのか。これに対する学生諸君の反応は(残念ながら)講師の側の意図とはまったく折り合わない反応だった。それは要約すると以下の3つの傾向を呈していた。いわく(1)割礼なんて残酷で恐ろしくて信じられない、割礼は女性への拷問であり到底許せない、スーダンの女性たちはかわいそう、といった生理的な嫌悪感に直結した感情的な反発が大多数。さらには(2)「人権の面から考えればあきらかに女性差別であり、女性の権利の蹂躪だから悪であると思われる」、だから許せない、といった、高校までに植え付けられたらしいある特定の文化圏の価値観を絶対の基準とし、その自明性を疑う事なく判断を下す「人権派」正義感の素朴な発露。(3)さらには、女子割礼の習慣とイスラームの教義とは歴史的に無関係と何度も説明したにもかかわらず、イスラームは女性蔑視で残酷だ、やっぱりイスラームは異様で怖い、といった短絡な事実誤認と逸脱的誤解。

とりわけ特徴的だったのは、スーダンの女性たち自身の証言も多く資料に引用して授業中に示したにもかかわらず、こちらにはひとりとして注目する学生がなかったことだろう。これと比較の意味で示したはずの『ホスケン・レポート』は、欧米の「解放」された女性の立場にたつて「人権」の確立を人類普遍の課題とし、こうした判断に立脚して、女子割礼を女性を隷属状態に縛り付ける人権蹂躪の事例であると規定して糾弾する政治的宣言の典型であるが、レポートを作成した学生たちは(女子割礼なんか自分には無関係、と宣言した1男子学生を除き)全員例外なくこの『ホスケン・レポート』の依って立つ前提を無条件に是認する立場から感想を述べてきたのである。最低限文化の相対性に気付かせ、さらにはできれば文化相対主義の限界にも気付いてほしい、などと虫のよい期待して

いた講師の意図を裏切って、学生たちはみごとに「人権学習推進科目」の意図に沿った模範回答を提出してくれたことになる。

割礼が女性の貞淑さの証拠とみなされてきた社会にあって、「欧米流の人権思想の価値観の押し付け」はかえって逆効果であり、むしろ母子の健康のために割礼が百害あって一利もない無意味な行為であることを説くことが肝心だ、として村々を巡回しているスーダン人活動家の女性、ラズワーク夫人の見解と実践例も示して、学生たちの反応を期待していた。だが、彼女の立場になんらかの配慮をしめした回答も、30通を越えるレポートのなかで、わずか2通しかみられなかった。

本年度の授業では、大筋として同様の話題を提供したものの、昨年のこの「みじめな失敗」の反省にのっとって、いくつかの「改善」を試みた。本稿では〔Ⅱ〕これらあらたな試みと、〔Ⅲ〕その結果表れた学生諸君の反応の変化を分析し、〔Ⅳ〕これを出発点として、現在の日本の大学の初期教育の抱える問題点を摘出したい。

Ⅱ 授業の組み立てにおける工夫

昨年の授業では授業のときにその場で資料を配り、ただちに講師が解説する形態であった。だがこのやり方にはいくつもの問題があった。まず(1)女子割礼という話題があまりにも刺激であるために、事態がぼんやりと把握できたところで生理的反応へと短絡してそれ以上理性的に対応することができなくなった学生があまりに多かったこと。(2)それ以前に、いままで満足な性教育を受けてこなかったため、生理学的説明、解剖学的常識が欠如していて、何の話か皆目見当のつかない学生がおおかった事(とりわけ男子の割礼がユダヤ教徒や多くのイスラーム圏では成人儀礼となっていることなど、自分の異性の場合の事情に関する完全なる無知、また自分自身の生殖器の名称にかんする無知)。(3)さらにはひたすら「血の汚れ」という文化的な抑圧を被ってきた18-9才の日本人(女子)学生たちには、こうした話題にたいする耐性その

ものが教育上・精神的に準備されていなかったこと（第3点は昨年の開講責任者であった岩本美砂子助教から受けた指摘であり、専門的にはなお社会的に詰めを要する論点ではあろうが、今深入りしない）。

このため今年度は講義に先立っての前の週に資料を配布しておき、あらかじめ予習をしておくように学生諸君に指示しておいた。具体的には配布資料において『ホスケン・レポート』、ナイラ・ミナイ著の『イスラームの女性たち』という書物から引用したマリム・シャミラーという女性による、イスラームの教義からみた女性観、先に触れたスーダン人のケース・ワーカーであるラズワーク夫人の見解が三者三様に違っているので、それらの論点を比較のうえで、自分はどの見解に賛同するか、またその理由、根拠は何かを考えておくように、との課題を前以て示しておいた。

翌週の授業においては、まず授業の冒頭でレポート用紙を配布のうえ

- (1) 先週あらかじめ示しておいた課題を復唱させ、
- (2) プリントを読んで、3者の見解を比較しての感想を自由に記入してもらい
- (3) 「女子割礼」にたいする学生各自の判断

- (賛成／反対／保留／無関心など)と
- (4) その根拠、理由づけを述べてもらった。そして授業で講師の側からあらためて説明をおこない、そのあとで
 - (5) 本日の授業を聞いて、(3)、(4)の見解が変化したか否か、またそれぞれの場合、その理由、根拠に関する考えがどのように変化したかしなかったかを正直に書いてもらった。ついでに付け加えれば、今回の授業で見解の変わった学生に有利な配点をするなどの誘導はまったく行わず、あくまで学生諸君の思考の跡を確かめるために、自由意志にもとづいて提出を求める旨断っておいた。

以下の報告では、こうして得られた学生のアンケートを基礎にして分析をすすめてゆく。

Ⅲ リポートの分析

Ⅲ-1 授業に先立つ課題の消化状況

授業に先立って1週間前に示しておいた課題に学生がどこまで応答してくれるか。これは主題そのものとはやや離れる授業環境および学生の動機付けの調査となるが、しかしこの結果は授業の内容とも無関係ではないだろう（表A参照）。

表A：授業1週間前に呈示しておいた予習課題を授業日に覚えていたか

	人 文	教 育	生 資	工	男/女	総 計
● 正 答 (3人の見解の相違・比較)	11	11	12	21	28/27	55
● 誤 答						
先週の授業の課題と混同	2	2	6	6	10/6	16
意味不明・課題無視	4	2	3	1	5/5	10
無回答・白紙・欠席	9	10	20	19	27/31	58
誤答総計	15	14	29	26	42/42	84
● 総 計	26	25		47	70/69	139

全受講者数：398 合格者数：210
医学部受講者：なし

調査実施日：1994年7月19日7-8限

表Aのように、先週の課題をちゃんと記憶して予習してきた学生は55/139と、返答した学生のみでも40%を切る。「覚えていない」、「先週欠席していたので課題がわからない」、「問題の発言が配布された(たった3枚のプリントの)どこにあるのか分からなかった」など、といったあっけらかんとした返答が「無回答・白紙・欠席」には多く含まれる。またどうしたわけか、先週の講義をされたエジプト人イスラーム夫人であるナイマ・ムハマドさんの問いをこの欄に書き込んだ場合が多くあった。日本人にとって宗教とは何か。結婚して姓が変わる日本の制度についてどう考えるか、などがその課題であった。「宗教なんていわれても自分には無関係でピンとこない」など興味深い反応も多かったがこの点は割愛する。さらにまたどこからかこのアンケートは提出が義務づけられているという噂が流れたらしく、あとになって大量の追加報告が舞い込んだ。これら遅延した返答では、「課題」を正確に返答していた率は、おそらく学生同士お互いに連絡をとったのであろう、比較的高かったが、それでも平然と「課題不明」とばかりに白紙のまま提出しているものも少なくなかった。ただしこと細かくここまで数字の比較はしないこととする。

最後に男女の差に関していえば、全学部をならすと、表Aの結果をみるかぎり男子と女子のあいだに、受講にたいする意欲で大きな差はみられない。しかし課題が女性運動家3者の比較であることを承知していても、実際にこの比較を詳細に記した学生はそのうち2割に満たない。実際の比較の結果まで勘案すると、全般的に男子学生が意見要約もせずいきなり自分の意見を直裁に述べる傾向をもつのにたいして、女子学生のほうが課題に忠実な分析的返答が多く、とりわけ生物資源学部の女子学生の場合、成績が進学振り分けを左右することもあってか、実に行き届いた3者の比較をまとめていた例がいくつもみられたことは特記するに値しよう。そしていささか先回りをすれば、こうして3者の詳細な比較をした学生の多くは、女子割礼に賛成か反対かとの問いにたいしても「態度保留」と

する場合が多かった。

Ⅲ-2 プリントを読んだ自由な感想

昨年頭ごなしの絶叫調、イスラーム糾弾ばかりという実態と比べれば、本年の場合、学生たちが一週間でずいぶんいろいろなことを考えて授業に臨んだことが伺える内容となっている。工学部の男子3名の提出したものに、まったく同一の文章を繰り返したものなども散見されたが、おおよそひとりひとりが自分なりに頭を絞って感想を書いたように思われる。勿論生理的反応から単純な思い違いに立脚した思い込みの暴論もあれば、さまざまな視点や価値観の多様性に配慮した考察、さらにはそれを越えて、ないしはそれ以前に、なんらかの普遍的な価値観に(反省を込めて、ないしは無反省に立脚して)意見をのべたものなど、多岐にわたる。これだけでも、昨年度の一本調子とは大きく異なった反応が得られたといえる。

以下、いくつかの論点に即して、主要な反応を引用・整理してみる。十分な展開がみられず論旨が癒着したものも少なくないが、そうした混乱ぶりがむしろ学生諸君の思考の実態を示していると思われる部分では、強いて細切れにして分類することは避け、比較的長く引用し、ついで対応するほかの話題との連環が読み取れるように、やや緩やかに配列した。なお[...]は筆者による割註としてのコメント。

ひとつ前以て断っておけば、「女子割礼」なる行為そのものの「存在」をあらかじめ知っていたと報告したケースはひとつもなく、以下のまとめでも、「知らなくて驚いた」式の発言は全体に共通するものとして、いくつか典型的な発言で代表するにとどめ、詳細に羅列することはせず省略したことをお断りする(資料A)。

資料A：授業以前の感想：「話題に沿って幾つかのグループに分類し、全体として通読できるように配列した。なお […] は筆者による割註としてのコメント。」

● 性的無知：

「“割礼”なんて言葉じたい聞いたことはなかった。こんなことがいまだにおこなわれているなんておどろきだ」（生資1年男子）。「“割礼”という言葉聞いたとき、きつと聖なる者になるための何かをするんだろう、とはおもったが、その内容を知り驚いた」（人文1年社会女子）。「割礼の慣習は現代社会では通用しないはずである」（工学1年男子）[「現代社会」といった用語の無反省な使用にひそむ無意識を洗い出すことが講義のひとつの目標となる]。

● 生理的反応：

「割礼などというものを始めて聞き、非常に驚いた。いまずぐそんな恐ろしい行為は中止するべきだと思った」（人文社会1年女子）。「読んでからだかぞっとするのを感じた」（人文1年社会女子）。「読んで途中で気持ちが悪くなりました。自分の娘がこのような割礼をされるとしたら正常な状態ではいれないでしょう。自殺してしまうかもしれません」（工学1年女子）。「ずいぶんひどいことだと思う。非衛生的だし痛そうだし、女性を男性の従属物としか思っていない」（人文1年文化男子）。「読んでいて気持ちが悪くなった。義式 [ママ] や様式にも限度があるはずなのにそれを無視するのは最低である」（工学1年男子）[限度を設定しそれを承認するのはだれなのかしら]。「かなり残酷だ」（工1年男子）。「ぞっとするとかこわくおもう」（生資1年女子）。「男である自分でも寒気がしてきた」（生資1年男子）。

● 本能的異文化蔑視：

「そんな危険で不衛生なことをしている国があることを知って、わたしはその国に生まれなくてよかったと思った。人間はやはり自然がいちばんいいと思うのだが、そんな危険なことをまた生殖器切除なんて恥ずかしくて嫌です。女性は性欲を抑さえ切れなとか強姦されるのは女性が悪いなんて読んでいたら腹が立って来た」（人文文化1年女子）[「恥ずかしい」はおそらく文化的精神分析を必要とする反応であろう]。「女性のからだに対してすごくむちゃで不自然なことをしていると思った。しかも子供のうちにしてしまうのは特にかわいそうだ」（人文文化1年女子）[文化は定義からして不自然とするのが西欧の思想の枠組みである

うが、こうした知識を前提として論じた学生は皆無。また「かわいそう」という主情的な反応による感情移入がしばしばものごとの判断の基準として登場しそれが多くの賛同を得るのも、とりわけ日本に特徴的な反応であろう。「たとえイスラムの女性であっても、生まれたままのからだを変化させてしまうようなことはやめるべきだと思います。アフリカにそんな文化があるということは知りませんでした。女性たちは、世界中の女性が同じことをしていると思っているというのは驚きです。まず自分たちだけのあいだで行われているのだということを知り、あらためて必要なことかどうか考えてみるべきだと思います」（人文文化1年女子）[次ぎの引用と比較のこと]。

● 自分の常識は他人の非常識：

「わたしは非常に恥ずかしいことに、今日この時間まで「割礼」というものが何であるか全く知らなかった。配られたプリントを読んで非常に驚いたし、はっきりいって気分が悪くなった。そのようなことを習慣として行い、女性であれば当然だ、と考えているなんて信じられない。一刻も早く誤った知識を改める必要がある」（人文社会1年男子）[勿論だれにいかなる権威で「正しい」判断ができるのかは問題外のままで、「正しい知識」の伝播により改善が可能とする楽天性の典型]。

● 男性支配への疑問：

「これは全くの男女差別で、イスラム教が関係しているとかの理由で [ママ] 考えにくくなるような問題ではないと思う」（生物資源1年男子）。「あきらかに女性差別」（生資1年女子）[どちらも根拠なき決め付けによる思考停止の典型例]。

「女性の性的快楽を奪うことで男性が女性を支配できるというのは大きな間違え [ママ] であり、そんな割礼が未だにあるなんて知らなかったのととても信じられない。さらに強姦などの例に見ても女性の人権や立場は全く考えられていないように思う。割礼は病気のもとにもなるらしいので何の利益にもならない。早くこんな無意味なことは廃止すべきだ」（人文1年女子）[冒頭の「割礼すなわち男性支配の手段」とする認識は『ホスケン・リポート』の前提とする「教条」であるが、ここでは政治的解釈=見解と事実とのあいだに区別がありうるが、のっけから考慮外に脱落している。次ぎの意見も同様に考慮し直すべき仮定を議論の前提と混同している]。

「すべての形態の女性の生殖器切除を廃止し女性という種族 [ママ] に対しての軽蔑を完全に取り除かなければならないと思う」（生資1年男子）。

「女らしさを求め、性欲を減少させるという目的は男性の勝手な哲学だと思う。でもそのような社会に黙って従ってそれが当たり前と思っている女性達にも腹が立つ」(教育1年女子)[啓蒙的女性論による優越意識形成の典型例。この「怒り」を次ぎの段階へと進められるかどうかが授業の成否だろう。「怒り」が自分たちの生活への疑問として回帰して反省した例として、次ぎの例と比較したい]。

● 因習と人権侵害との狭間:

「女性として、一番女性たる器官を男性の見解から[ママ:これも裏付けを明記せずにホスケン・レポートが当然の前提とする視点]取り去ったり、縫合してしまうのは絶対におかしいと思います。しかし風習、因習ならしょうがないのかな?とも思いました。私も無意識にそうしなければならないなあと思込んでいるところがあるし、反感を感じてもそうしている部分がある」(教育1年女子)。「女性の人権侵害というべきか女性を保護するためだというべきか、なんともわかりません」(生資1年女子)[ここで教育の役割、さらには医療の面からの合理性の検討が必要となる]。

● 教育と慣習との落差への疑問:

「なぜ熟練した保険医や医師が割礼手術を行うだけで、正しい性教育が行われぬのか?」(人文文化1年女子)。「割礼をうけていないとまともな結婚ができない、というのには納得がいきませんでした」(教育1年女子)[いずれも自分たちの常識に照らして理解不可能な現象を前にしての思考停止。熟練した保険医の技量が社会的慣習を打破して「正しい性教育」に結び付くどころか、むしろ科学が「非科学的」慣習を強化するための合理的な補助手段となる皮肉への無理解]。

「どうして自分達の子供を生む女性に割礼をおこなうのだろうか。またそれを[内容不明]理由に離婚させられるのだからなおさら疑問である。わたしはただ男性が自分達に女性と同じように性欲があるということを恥じて、それを防ぐために女性を犠牲にしているようにしか思えない。女性は男性より劣っているという考えが強くある限り割礼の習慣はなくならないように思う」(人文1年文化女子)[男性による支配の押し付け、という図式ではなく、その図式が女性の内部に植え付けられて再生産されている点に気づき、自分なりの論理を紡いだ例]。

「割礼をすることによって病気の感染はしない時に比べて何倍も高いでしょうし、性生活もうまく行かないでしょう。何が怖いかというとその社会が「女性は割礼をして当然であり、それをしてい

ない女性は不浄である」ということを女性に対して教え込んでいるということです(…)割礼とは浄めの意味で女性のからだのためにやるものなのでしょうが、現実にはまるっきり逆なんですよ」(教育1年女子)[社会意識に組み込まれた女性蔑視の構造を根拠に女子割礼の理念と実態との対立に気付いた例。これはいわば前項最後の、「女性への侵害」か「保護か分かりません」との判断放棄の先に進んで、この疑問へひとつの自分なりの回答を示している]。

● 人権問題ではなく衛生問題として:

「ラズワーク夫人は正しいと思った。この夫人の説得のしかたも正しい。まさに「イスラムを理解して」いる人だと思う」(教育1年男子;工学1年女子、同男子;生資1年男子)[この種の返答で困るのは、その「正しい」と思う主張を自分なりに整理しなおす訓練の欠如である。以下の引用も[…]を補わないとそれだけでは意味不明である点に学生たちの「意見表明能力」の不十分さが同われる]。

「衛生や病気などの諸問題を考えると[女子割礼は]やめたほうがいいと思った」(教育1年女子)。「[ラズワーク夫人の活動を紹介した部分の]資料のなかに[女子割礼を施さなくても]“処女性は十分守られています。[施すとかえって]病気になってしまうしエイズも移ります”と[ラズワーク夫人が]説いている話があったけど、そういう説明の仕方があって、それで納得できるのなら、人権云々以前にそういった言い方で廃止していったほうがいいと思いました」(生資1年女子)。

[あくまで「衛生問題」として女子割礼廃絶に取り組むこの見解と、あくまで人権問題として女子割礼廃止を政治的に訴える『ホスケン・レポート』とのあいだには明確に対立があるが、両者を弁証法的に捕らえたり、両者比較のうえで二者択一の決断を下した学生はこの1名のみ。多くの学生はこの対立に留意することなく、『ホスケン・レポート』の立場に簡単に同調していた。その例を以下に列举する]。

● 人権擁護の立場へ同化した見解:

「女に人権がないことに憤りを覚えた」(人文1年社会女子)。「女性の人権を無視した割礼は忌むべき行為である。人間の快楽の中で最も大切なもののひとつであり性的快楽を奪うことは許されない。幼いころになにもわからないままに割礼され、そして何も分からないまま生活させられることが一般的になっているなんてとても恐ろしい」(人文社会1年男子)。「性器の一部を切り取られるなどという人権を侵すようなひどいことが世界で

われている所があるという事実は、今の私には想像もつかないくらい恐ろしいことです」(生資1年女子)。

「男にたいする割礼とは違って、女性に対する“割礼”は女性の尊厳を傷つけている。[これでは到底]文化とは言えず、通過儀礼としても認めることはできない。日本にすんでいるために、いらぬ道徳感[ママ]からかかんがえているためかもしれないが、やはり文化と認めることはできない」(工1年男子)。「[“人権”]といい[“尊厳”]といい、これらともに判断根拠不明なままの超越的切り札で、なお一方的な決め付けに終わっている。最後の意見の場合には、自己本位の規範=道徳をもとに下した[“文化”]定義によって、他文化を[“文化ではない”]と切り捨てるが、それを自分の日本文化への文化拘束性ゆえかと自問しているところに、なお発展の余地があるだろう」。

「男性と女性とは根本的に異なっているが、それでも互いに人権をもった同じ人間である。明確な理由もなく一方的に女性が卑下され“女子割礼”なるものが強制されることに恐ろしさを感じるとともに、強い怒りを覚えた」(教育1年女子)。

「アラブの女性の扱いは文化的差異だとか貞操観念の相対的な違いといくらいわれても、程度というものがあります。イスラムの女性と西欧の女性とどちらが幸福かいちがいにはいいきれないとはいえ、イスラム女性にその選択権がないということ自体虐げられているのではないのでしょうか。不幸かどうかをきめるのは両方を知った人が決めることだと思います」(人文社会1年女子)。

「“女は性欲をコントロールできない”とかいうのはおかしいと思う。どちらかという男の方がコントロールできないような気がする。強姦を女性の方が悪いという一方的な考えしかないのはおかしいと思う。男性の方が自制する、というのがやはり男女平等[ママ]という点から見ても当たり前だと思う」(生資1年男子)。

[最後の2例はいずれも論理構築の破綻は明白だが、自分でも問題を持って余している様子は如実に伺われる。前者は「ものの程度」という日本社会的良識を持ち出しながらこれを貫徹できず、結局自分の知らない文化圏の「幸不幸」の判断は差し控える配慮を示す。また後者は男性が自制することが「やはり男女の平等」とする不思議な譲歩ないしは、隠された男性優位意識を隠蔽する自己囁きだが、その論理破綻の現場に「やはり」という、〈無根拠を合理化する記号〉が登場する点に注目]。

● 西欧の人権思想への疑義：

「プリントによると手術に反対する場合の理由が、

女性から性的快楽を奪うことによる人権侵害である事が、少し疑問に思える」(人文文化1年女子)。「ホスケン・リポートは異文化として中東アフリカを見ているとしても同等としてみていないのではないか」(教育1年女子)。

● 教育の必要性：

教育そのものが、その内容が科学的根拠のあるものかどうかを問わず、ひとつの権力の行使である、という観点は、高校までで教えられていないためか、まだ学生たちにはひろく認識されていないようである。科学的合理性が社会的正義として無批判に最優先されるべきなのか。教育すなわち善と無前提に認めてよいのか。教育の欠如すなわち人権の侵害とする議論は妥当なのか、など、昨今の「子供の権利」と「社会規範の押し付け」との兼ね合いをめぐる大人たちの国際条約上の議論にもかかわる困難な論点が、初歩的ではあるが以下いくつか散見された。

「意志に反して幼い時に割礼がおこなわれているのは人権の侵害だと思う。事実に基づかないこじつけから女性を切除したり、縫ったりすることが、世界のある地域で行われていると思うと、何か怖い気がする。早く性の本当の知識を浸透させて、[女子割礼を]なくしたいと思った」(教育1年女子) [“教育は正義”説の一例]。

「女子割礼は恐ろしく、人権を無視しているものだと思うのだが、その国では“当然”のこのように思われている部分のあることが一番こわかった」(生資1年男子) [問題の深刻さをメタのレヴェルから捕らえた考察の一例]。「女性割礼儀礼[ママ]は男性だけが要求するものではなく、女性もその儀礼からはずれることが怖いようである。男性から嫌われるからのようである。まず女性が割礼の不必要を教えてゆかなければならないと思う」(人文社会1年女子)。

● イスラムの教義への短絡した誤解、およびそれへの対論：

「イスラム教の創始者たちは[女性割礼を強要するとは：〈ママ〉]女性に恨みでもあったのでしょうか」(生資1年男子) [この論点はいますこし掘り下げると、牧畜社会において家畜の去勢や妊娠調節が人間にも適用されて支配・被支配の権力関係の起点として機能したという仮説に至りつくだらう。この一項目を補うことで、なぜ女子割礼が女性支配の道具なのか、という『ホスケン・リポート』ではなぜか論証されず当然の前提とされている暗黙のメカニズムが理解可能とはなるが、ここで問題となるのはむしろなぜ『ホスケン・リポート』がこの説明を取って隠蔽し通したのか、とい

う点だろう。ここにおいてこそ西欧社会の権力機構を巡る精神分析が必要となるだろう]。

「イスラム教徒は自分達がまちがっていると感じてくべきです。こんな人間の機能を奪うような残酷な宗教はこの世からなくなればいいのと思います」(教育1年女子)[女子割礼とイスラームとは無関係と指摘したにもかかわらず、今年もこの種の反応がいくつか出現したことは指摘する必要がある。この短絡は何故か]。

「宗教を信じてそれに従うというのなら差別はあっていいと思う。差別をなくすには宗教を改宗する必要がある」(工学1年男子)。「イスラム教に限らず宗教の中における男女差別は差別ではない」(工1年男子)[宗教権威と世俗社会の原理との両立不可能性に関して、『ホスケン・レポート』の問題設定のフレームに対して疑義を呈する初步的な見解だが、この論点はつきつめると大きな哲学的問いに至るだろう]。

そのほかエジプトとマレーシアの男子留学生(ともに工学部)から詳細な意見が寄せられた。ともに、女子割礼には一切触れず、またレポートの課題ともまったく無関係に、イスラームにおける女性の地位を分析し、イスラームの立場を擁護しその利点を強調したものである。自分たちの意見というよりは、幼少の折から教育されてきた常識的な公式見解の復唱に留まってはいるが、いかにも日本人学生たちの反応とは異なっていて異彩を放っていた。だが多くの日本人学生たちはこうした留学生が同じ教室にいたことすら気付いてはいなかった様子である。事情が許すならば、日本人学生たちとのあいだで議論をする機会と環境を整えたかったが、日本人側の常識とイスラーム圏からの留学生たちの常識との隔たりが大きすぎて、論点を絞り込む以前に、そもそも議論が成立しなかった恐れも大きい。

● イスラームの女性観への反発ないし同意前提を問直すことなく子供のときから当然とされてきた道徳を疑問に付すことはかなり困難とみえ、一夫多妻に対しては多くの感情的・個人的反発が出た。

「わたしは女性差別として女子割礼[ママ]を問題にした[ママ]ラズワーク夫人に賛成だが、一夫多妻に反対しないマリyam・シャミラーに疑問を感じます。マリyamは夫の愛情をもとめないのだろうか。また反対しないのはマリyamが他国の女性の生活に無知だからなのか」[学生に配布したプリントにシャミラーはドイツ系婦人でバキスタンのイスラーム系代議士の家庭に嫁いだと明記してある](人文文化1年女子)。「私が一番驚いた

のは一夫多妻の方が幸せだという意見です。私は全くそんなふうに考えられません」(教育1年女子; 工、1年男子)。「一夫一妻だと往々にして夫が愛人を作り…[だから一夫多妻のほうがよい]」と一方的に決め付けているのは、間違い、偏見だと思う。納得できない」(工1年男子)。「イスラム社会は性に関して何らかの犯罪などをすべて女性の責任にしているように思う。なぜそこまで女性の罪にされねばならないのか、と思う」(工1年女子)。「一見するとイスラームの女性はしいたげられているように見えるかもしれないが、それがイスラームの文化であり、性質であるのならば、とくにイスラームの女性がしいたげられているとは思えない」(工1年男子)。

● 文化相対論的見解の萌芽:

「プリントを読んで割礼をするのに何の意味があるのかは、私にはちょっと理解できないけれど、割礼をしている人には何か重大な意味があるのかなあと思った」(教育1年女子)。「僕個人としては女子割礼には賛成できないが、だからといって中止を強制できるということはないと思う。むしろの全員がその行為の無意味さを知る必要があるのではないかと思う」(工1年男子)。

「女性は性欲をコントロールできないという神話がはびこっているというが、日本ではどちらかといえば男性の方がそういわれているので、全く逆であることに、土地によって違うんだなと感じました」(教育1年女子)。

「ひとつの価値感[ママ]だけでは文化交流はできないと思った」(工1年男子)。「[3者の主張を要約してみると]ホスケン・レポートもラズワーク夫人の見解もナイラ・ミナイの本の証言もどれももっともだな、と思う」(人文1年文化女子)。

「こんな生活は私たちから見ればとても人間的とは思われない。しかしこれは外部からの目であって、彼らにしたらそれが当たり前なのだと思うと大変恐ろしい」(教育1年女子)。

● 判断表明への躊躇

「まったく違う文化をもち、考え方常識などが全くちがう文化のことについて自分が意見をのべるのはとても難しいと思う」(教育1年女子)。

「その制度を定めている宗教に入っている人はそれが当然のように教えられ、彼女らも当然のように思っているため、無宗教の、文化の違う国に住む私には、何も言う権利はないと思う」(生資1年女子)。

● 講義への目標

「イスラーム社会というのは本当に「別世界」だという気がした。「女子割礼」、「一夫多妻」など、

そういう世界があるというのは頭ではわかるが、
 実際問題としては理解できない。けれども根本的
 なことを何も知らないわたしなどが批判できない

文化的背景があるのだろう。この講義を通してそ
 れを知ることができれば、と思う」(人文文化1
 年女子)。

Ⅲ-3 授業前後の学生の意見の統計的变化と
 その分布 ²

昨年の場合と比較すれば、授業を始める前の
 段階で、Ⅲ-4の資料Aに列挙した程度之多
 岐にわたる反省が既に得られていただけでも、
 大きな改善といえるだろう。とりわけ最後に引
 用した意見は、いささか授業にたいして期待過
 剰だともいえる反応だが、授業にむけての誘導
 が無意味ではなかった証拠とはなるだろう。

仮になおもう一週間の余裕があったならば、
 こうした学生たちの反応をまえて集計した
 うえで論点を整理し、それを出発点として講義
 予定を組み、授業に臨むのが、より理想的だ
 ったかもしれない。しかしそこまでの時間的余裕
 はなく、また1週間以前に提出しておいた課題

ですら、それを記録ないし記憶にとどめている
 学生が40%を切る現状では、これ以上長期にわ
 たる体系的な試みをしたにしても、より効果的
 な授業成果が得られたかどうかは疑問だろう。

実際の授業では、昨年経験も加味して、で
 きるだけ体系的に論点を整理し、以上列挙した
 さまざまの論点について、学生たち同士にもさ
 まざまな意見の対立があることに気付かせるの
 が精一杯であった。まずこの授業を通じて、学
 生たちが授業前の意見・判断をどのように変更
 したかしなかったかを、統計的に確認すること
 から始めよう(表B)。個人の意見の変貌過程
 については(表C)で個別に指摘したい。

(1)を示し、(2)は資料C)

表B：授業前後での学生の意見動向の統計的变化【数字は人数】

「女子割礼」という社会風習について、賛成か反対か態度保留か、態度を表明する。

		男 子				女 子			
		賛成	反対	保留	その他	賛成	反対	保留	その他
人文学部	授業前	0	9	0	0	0	15	3	0
	授業後	0	7	2	0	0	11	6	1
教育学部	授業前	0	1	0	0	0	18	6	1
	授業後	0	1	0	0	0	15	8	2
工学部	授業前	0	30	7	2	0	7	0	0
	授業後	0	19	18	3	0	5	2	0
生物資源学部	授業前	0	11	5	1	0	16	6	0
	授業後	0	8	8	1	0	13	5	4
全学部	授業前	0	55	12	3	0	56	15	1
	授業後	0	35	28	4	0	54	21	7

(実施時間、実施対象、サンプル数などは表Aに同じ)

Handwritten calculations and notes:
 4
 4
 72 / 52 = 1.38
 164 / 66 = 2.48
 64 / 72 = 0.89
 42 / 22 = 1.91
 40 / 22 = 1.82
 (?)

この表Bについて、とりあえず以下3点を指摘しておきたい。

- (1) まず一見して明らかなように、授業の前では、女子割礼に対する単純な反対が減少するのにかわって、態度を保留する学生の割合が増えたことがまず指摘できる。また調査を担当した講師側としては、配布した資料を参照した学生のなかで、だれひとりとして割礼を是認した者がなく、また授業前の段階で「態度保留」としたものが22%と少なかったことに、却って驚いた。三様のまったく異なった価値観が表明された資料を授業の1週間前に見ておけば、昨年の場合とは違って、もうすこし意見に散らばりが生ずるだろう、という予測が裏切られたからである。
- (2) つぎに、男女差を見ると、男子学生の場合には授業後、態度保留と報告した学生の割合が40%にのぼるのに対し、女子学生の場合には29%ほどに止まっているのは、おおきな男女差といえよう。うえの統計からはすぐには確認できないが、実際に個々の場合を追跡調査してみると、男子学生の場合、予習をしてきたグループもしてこなかったグループのどちらも一貫して、授業冒頭での「反対」から授業後「態度保留」へと流れる傾向が多く、その逆は1例もなかった。これに対し、女子学生の場合には、とりわけ予習せずに授業に臨んだ段階で「態度保留」としていたもののうち2例が授業終了時には「反対」の立場を表明した、という差異が観察された。
- (3) 最後にこの表について付け加えるべきこととして、授業後のコメントとして「自分の個人的見解としては割礼には反対だが、その判断を、割礼を社会習慣として実践している社会の構成員に対して高飛車に押し付ける権利や義務があるかどうか」という論点が初めて大きく登場したことを指摘したい。この判断の是非にたいしては、20名以上の学生が躊躇を表明している。(表B、C)はそうした躊躇ないし微妙な判断を考慮には入れつつも、最終的に「反対」が「態度保留」か、という基準でいささか無理やり裁断した結果にすぎ

ない。つまり授業後の段階では、もはや「女子割礼」を一方向的に糾弾してよいか否かという当初の設問では適切な回答が得られない、というところまで、学生たちの批判的意識が発達してきたといえるだろう。

ここからただちに反省すべきは次の2点であろう。

- (1) まず授業開始以前に、『ホスケン・レポート』、ラズワーク夫人の見解、ナイラ・ミライの本から引用したイスラーム夫人の見解の3つの見解のどれに賛同するか)、との問いをきちんと立てるべきであった。
- (2) さらに、授業終了後の設問としては、〈一般に異文化における習慣的実践に対して、外部の他者としてその廃止を求めることは権利問題として妥当か。またそれはいかなる条件において妥当すると考えるか〉、〈女子割礼の場合に限ってみれば、その撤廃を外部から求めることの妥当性はどうか〉、といったより突っ込んだ問いをたてるべきだろう。

しかし、以下にみる学生たちのコメントからも明らかなおお、問題がここまで微妙になると、統計処理の結果を示すことには、もはやそれ自体としてさして意味はなくなってくる。むしろこうした答えにくい設問に対して個々の学生がいかに対処したかを分析することのほうがより重要になってくるだろう。実際こうした設問そのものに疑義を呈する学生や、こんな設問には答えられないとして、返答をなんらかのかたちで拒絶ないし回避した学生も出現した。便宜上「その他」に分類したこれらの見解が、授業の意図からすれば最も大切な要素となってくる。

Ⅲ-4 授業を通じた学生の判断力養成と意見形成

あたかもそれが予定調和の事態でもあったかのように、授業を通じて学生たちの見識が啓発されたかのごとくストーリーを再構成することは、もとより本稿の意図するところではない。それどころか、予習の課題を記憶していた学生は4割弱、課題にきちんと回答をしていた学生

は全体の1割という教室環境では、結局昨年と同じく、教室で得た第一印象に固着して、それから先はまったく聞く耳をもたずに安易な結論にしがみついた学生も少なくなかったことを、決して忘れてはならないだろう。実際、授業後の感想にも、講師の意図とはまったく裏腹、無関係にも、このような主観的かつ一方的な言葉が、根拠を示すこともなく、繰り返されている：

「[女子割礼は]絶対に許せない」。「冗談じゃない」。「イスラム文化の考え方にはまったく共感できない。いかにも男尊女卑である」(ともに工1年女子)。「ふざけた話だ」(人文社会4年女子)。「イスラムのひとたちはすごいという印象があるので[反対意見には変化なし]」。「ひどい儀式である」。「人道的でない」(教育1年女子)。「女性を支配するようなまちがった考えはよくない」。「女性は野蛮な生き物だと私も感じた」。「感想：イスラムの女性には驚いた」。「昔の体制にとらわれるのはおろかな事だ。進歩のないものはばかなのだ」(ともに工1年男子)。

こうした固着や思考停止は、強靱な思考力の訓練をうけてはいない脆弱な精神の殻が、危機的状況を前にしていれば自らの意志でその蓋を閉じた場合でもありうる。だから、ここで立ち往生では困る、心を開かないのは逃避だ、学生としての持ち場放棄だとか、学生たちの精神の蓋は何としてもこじ開けねばならないとかといった判断を下すのは、むしろ教育上あまりに危険だろう。ここから先は個人別の心理学的カウンセリングに頼るべき領域ですらあるのだから。

ただひとつ気になるのは、こうして“女子割礼問題”を前にしてあっけなく思考停止に陥る日本の学生たちにはたして、女子割礼を受け入れる女性たちの“批判精神の欠如”と“無知”を批判する、権利という以前に能力があるのかどうか、との疑問である。自分の育った社会における常識と良識とに“盲従して”これを問い直す能力を奪われている、という点にかんじていえば、彼女たちと自分たちとは五十歩百歩では

ないか——という自己回帰の反省的認識にいたる学生すら少数でしかないならば、異文化理解の一貫として「女子割礼」という話題をとりあげたことの意義は半減するだけでなく、むしろ「女子割礼」とは教義上は無関係なはずのイスラム圏や割礼を慣習とするアフリカの人々に対する、日本の学生たちのいわれない偏見を助長して、かえって危険な害悪を及ぼすことにすらなりかねない。

最低この点の自覚を聴講した学生ひとりひとりにしかるべき時点で持ってもらいたい。そのため、以下すぐさま高尚な結論に飛び付くことは避けながら、学生たちの第二ラウンドの、いささか堂々巡りで反復の多い議論にあくまで即しながら、分析とコメントを進めてゆくことをお許しいただきたい。学生諸君の感想の揚げ足を取ることや、正解(があるとして)を一方向的に押し付けることは、ここでは何の意味ももたない。ひとつの異文化理解にかかわる社会問題への学生たちへの取り組みを批判的に解剖する作業を通して、逆に露呈してくるのは、我われの学習環境を目には見えぬかたちで規定し支配している、この社会の病理だからである。

以下まず資料Bで授業後の学生の意見全般を概観する。ついで表Cにより授業の前後で学生の意見がどのように推移したかを個人別に追跡し、さらに資料Cによってこの意見の変化の内実を詳しく分析する。

資料B：授業後の学生の意見、

● 異質なものは受け入れられない

「もうそんなもんがあること自体信じられない。割礼があるなんて考えたこともないので〔割礼には〕反対です」(生資1年女子)〔これが反対の“理由”なのだろうか??〕。

「アフリカの人には割礼を受けないと結婚できないとか言って居るみたいだけど、そうゆうかんがえがおかしいことだと思うし、私たちとはちがう種類の間人だと感じてしまうから〔割礼には反対である〕」(生資1年女子)〔“自分と違う”が拒絶の理由として大手を振ってまかり通っている典型例〕。「よくわからないから。それよりも何より“痛さ”をかかんがえるとおそろしいしこわいので〔割礼には反対です〕」(生資1年女子)。「意見がないから〔女子割礼には反対〕」(生資1年男子)。「悪いことばかりでいいことがないから。」「おかしいから〔おかしい??〕」(人文文化1年男子)。「特に理由はないがうけいれることが〔心理的に?〕できないから〔反対〕」(工1年男子)。

こういう“理由”に接するといささか絶句するが、裏返せば高校までで、いかに自分の主張を論理と根拠を示しつつ展開する訓練を受ける機会がなかったかが察せられる。

● 「男女平等」、「女性の人権」スローガンの一人歩き：

講義のなかでは、「人権」、「男女平等」といった西欧の考え方がイスラームにとってはその根幹で受け入れがたいものを含んでいることを、「クールアン」などを引用して詳しく説明したにもかかわらず、その点にはまったく言及せず、出来合いの錦の御旗にすがりついて満足する姿勢がなお濃厚である。さらには健康を理由とする割礼廃止運動と、人権を理由とする割礼糾弾運動とが対立していることを詳しく説明したのに、依然としてこの点の区別を自覚しない、分析力の欠如：

「女性の人権というものがなくなるし、健康にもよくない。このようなことをしていると男女平等などとは言っていられなくなるから〔廃止すべき〕」(工1年男子)。

「講義を聞いてみて、やはり割礼は人権を侵害しているものであり、絶対に廃止すべきだ習慣だと思った」(人社1年男子)。「人権の面から考えれば明らかに女性差別だから」(人社会1年男子)。「“やはり”症候群、“明らか”症候群をいかに撃退するか〕。

またこうした説明ゆえに、またしても“女子割礼”

をイスラームと結び付けてしまった例。文章も混乱しているが、その錯乱ぶりを放ってそのまま引用したい：

「わたしたち日本人はそんなことをしないのに、イスラーム教を信仰しているからそれが正しいとかんがえるようになり、自分のしていることが間違っていると気付かなくなって“女子の割礼”の儀式をうけるのは正しくないと思います。だから“女子割礼”には絶対に反対です」(教育1年女子)〔論理の破綻と循環にむしろ心の叫びを聞くべきだろうか…〕。

● 男性支配に決まっている：

「“女子割礼”は男性が女性を所有物として扱っているという印象を受けた。女性の人権を無視している」(生資1年女子)〔“印象”を例証し、根拠つけてほしい…〕。

「ラズワーク夫人の見解は女性の割礼が女性自身やめてはけないと書いてあり、ホスケンは男性が女性にたいして強制していると書いてある点が異なるのではないかと思う。／私は、女性自身、男性に強制されたことをやめられないことが男性に強制されていることになるのではないかと思う。もちろん最初は男性の強制からはじまったということです」(教育1年女子)〔なぜ“もちろん”なのだろうか?〕。「“女子割礼”を行うなんて女性差別、女性侵害〔ママ〕であると思うし、弊害つまり感染症への感染率の高さをかかんがえると無意味であるから」(生資1年女子)〔前半部が一方的な決め付けでしかないことにはお気付きではないらしい。この殺し文句で正義が語りうると思ひ込みから、なんとか脱してもらうのが目標なのだが…〕。

「“性欲の激しい女性と結婚したいと思う男性は一人もいません”と〔スーダンの女性の証言として〕書かれています。これは単なる女性の思ひ込みだと思います。かつて多くの女性は“むく”〔無垢〕であることを望まれました。男性が女性を開発する、目覚めさせる”といった言い方があるように、男性が女性を支配することの典型なのです〔何が? 文意不明瞭、“女子割礼”が—か??〕」(生資1年女子)。

「わたしから見ると切除も陰部封鎖〔ママ〕も健康な女性が傷つくように考えてしまう。自然の状態でいるのは男だけ〔ママ〕。男は性的暴力を謹むことはしなくてもよい。女性が街を出歩くのが悪いなんていうのは女性差別としか思えない。封鎖していないと売春婦と思われる、嫁にも行けないなんて全く腹が立つけど、絶対嫌です」(人文文化1年女子)。

最後の例では、生理的嫌悪感の吐露、断片的な情報を繋いで紡ぎ出された好き／嫌いの判別が善／悪の判断に優先し、善／悪を決定しかねない、という危険な兆候がみられる。この善し悪しはとにかく『ホスケン・レポート』の政治的修辞学がみごとに効果を発揮した結果発生した典型的な反応といえよう。

「イスラムの女性は男性に支配されるのが当然である。女性を割礼することによって男性が支配できるということを意味していると考え人が多い」(人文文化1年女子)。

ここには3つの取り違いがある。まず(1)“割礼”即“イスラム”という規定は授業で何度も誤解であると説明したはずのこと、つぎに(2)“男性が女性を割礼する”という思い込みにある象徴的次元と現実的次元の区別の欠如、ないしイスラム圏の男女関係に関する無知、さらに(3) (すくなくとも象徴的な次元でイスラム圏にも存在するこの風習が女性支配を) “意味している”とするのは、あくまでも『ホスケン・レポート』の立場であって、現地の女性たちにこのように“考える人が多い”という思い込みは、この学生が『ホスケン・レポート』の主張を一人合点で現場に転移させた結果にはかならないが、本人にはまったくその自覚がない。

次の引用は「人権」の定義をこの問題との関連で自分たちなりに考えてみた、きわめて少数の例。

● 「人権」の定義と性的快楽

「『割礼』に反対な理由は】人間から快楽を取り除くということは、つまり屈じょく行為であり、その思想というものが私には理解しかねるところがあるからだ」(生資1年男子)。

「女性から性的快楽を奪うことは、人権侵害だとも思う」(人社1年男子)。

● “割礼”の意味とは：

これにたいして、そもそも“割礼”にはそれを行う社会でいかなる意味があるのか理解できなくては、それを“女性差別”といえるかどうか判断不可能、という立場もある。この立場は、意味理解の必要を感じずに、一方的に「女性差別」との断言を下すグループとは一線を画すが、そのためかえて自分では結論が出せなくなった。

「それなりに意味を持って割礼をしている人たちもやっぱりいるのかもしれないと思ったじや、その意味も理解せずに女性差別だと考えている人もいたと思った。割礼をする意味を理解したうえで、女性差別と考える人もいるのかなあと思った。授業を聞いた限りではわたしには、割礼をしていることの意味を納得できるような理解はできなかつ

た。やはり無意味であるように思えた」(教育1年女子)。

「女子割礼に反対なのは、そのことに意味があるのかどうか疑問だからである(…) おまじないのように割礼をしてそのうえ病気になるのでは意味がないではないか」(生資1年女子)。「手術するのなら、するの的に[ママ]した衛生的にも技術的にも整えた方がよいと思う」(生資1年男子)。

「しかし割礼にも必ず意味があると思います。長い歴史で消えずに残ったという事実を、たんなる無知では説明できないものがあります、その事実を“中東アフリカでは一般に女性は性欲をコントロールできないと信じられている”という一言では表すことができないはずです」(生資1年女子)。

● 「人権」のかわりに〈人権 V.S. 生存権〉という提案：

「女性の人権というよりも生存権の侵害だと思う。人は生きて行く限り、身体的にも精神的にも健康であることは、当然の権利のはずである。価値感[ママ]の違いといえるかも知れないが、生存権の侵害は現代では許されない行為であると思う」(工1年女子)。「[人権]では問題が捕らえ切れないと考えて、別の次元に視点をずらせたよ衣着眼だが、この論点は以下のように常識によって量されてしまう：]

● 「身体髪膚これを父母に受く」：儒教的道徳観の振れた噴出

「親からもらった大切な体に傷をつけることは残念なことのように思える」(工2年男子)。「もって生まれた本来の体や姿などに手を加えるのは罪である。人間そのものの権利を奪うことも罪だとも思う」(工1年男子)。「人間が神の被造物ならば、それに対して手を加えることは罪なのではないでしょうか。つまり生まれた姿に手を加えるのは整形など日本でも存在することで、やはり罪なことのように思える」(工1年男子)。

これが過激化すると、次ぎのような農耕文化(?)からみた牧畜文化への無知と偏見、さらには“綱吉”ばりの生物虐待弾劾論へと“発展”する：

「この世に生まれ落ちて来た生命、人間であろうと植物であろうと昆虫であろうともかけがえのない尊いものであるから、絶対に故意に体を傷つけるのはよくない」(工3年男子) [これでは牧畜はおろか植物の品種改良やピアスや遺伝子操作もすべてご法度だろうが、なんらかの宗教的信念に基づく発言ならとにかく、まじめに考えてこの結論に至ったのなら、日本の教育程度も改めて危惧するに値するだろう]。

「どうして神さまから授かったこの体に傷をつけ

ねばいけないの。(…) 同じ女性としてこんなことされたら女性として産まれてきた[ママ]意味がない。一刻もはやく考え直してほしい)(生資1年女子)[誤字は精神分析する価値あるべし。また「早く考え直してほしい」というつきはなした断罪口調にも、無意識のままの優越意識が見られようが、これが母性への無条件な連帯への信頼に癒着し、限定されていない“敵”へのこれまた無条件な嫌悪感となって表出している点に注目したい]。

● 禁忌、タブー、不浄観

「自分の体は自分が管理すべき、なにもわからない子供の時に“不浄”だからという考え方を押し付けるべきではない)(教育1年女子)[これも自分たち自身が植え付けられてきた観念への反動形成を他者にそうとは知らず“押し付けた”例か?]

「第一、人が生殖のために与えられた器官を“汚らしい”とする考えがわからない。それにいたいけな少女が不安にさいなまれて手術台にのぼる姿は本当に痛ましい)(人文文化1年女子)。「女性が欲望をコントロールできないなどと考えられているのはしんがいだから[女子割礼には反対です])(人文文化1年女子)。

「本当に身を清められたことになるのかどうかよくわからないが、やはり女性だけ割礼を行う[ママ]ということは差別だし、ひどいことだと思う)(生資1年女子)。

「女は野蛮で性をコントロールできないからという昔の話をひきづって、手術をするのはばかばかしいと思う。自分の世界ばかりをみていないで、まわりの様子もうまくとりいれて進歩し改革してゆくことも大切だと思う)(教育1年女子)。

ここには禁忌、タブーといったものの心理的・社会的構成にたいするまったくの無知が露呈しているように思われる。しかしそれはこうしたタブーが文化的に教育過程で抑圧されてきたことへの、なかば無意識のままの反動形成として、自らのうちなる病理を、未知なる“野蛮”社会へと投射してお説教におよび、密かに優越感と安心とを得る構図ともいえるだろう。外への攻撃性と内部の脆弱さが表裏一体な様子は、次例に見える問題のすり替えに典型的。これはまたあまりにナイーブで優しすぎ、かえって読む人を不安にさせる傷つきやすい魂を感じさせる：

「ある意味で女性は精[ママ]なる生き物で、手を出してはいけない…というのわかるが(…)」

それを汚い行為と考える考え方が間違っていると思う。もう少し人の“いのち”は何のためにあるのか…というのも考え、それはどこから来るのか

も考えられるようになってほしい)(工1年女子)。

● 子供の自由意志と通過儀礼

「宗教がらみの言い伝えや考え方に染まっているだけで、これは立派な人権侵害だと思います。自分の体は自分のものであって自分の意志で定められるものなのに習慣によって割礼[ママ]をよぎなくされるのはあんまりだと思う)(人文文化1年女子)[幼児洗礼は肉体的虐待でないから許される、という論法だろうか?]

「[許されないのは]自分の判断能力の未発達な幼児にまで強要することである。その(ある宗教を信仰している)親は、自分の子に宗教を押し付ける事は断じて許されるべきではない、そう考える。だからまだ物心つかつかないかというような子供にはなはだ“宗教的”な“女子割礼”を行うことは許されざるべきことである)(工2年男子;人文文化1年男子)[「エホバの証人事件」も同様の論理で裁けるか?]

論理展開としてもはなはだ撞着したこれらの見解は、宗教の自由を憲法で定める国においても必ずしも常識的見解ではなく、まして国教にイスラームを戴く国ではまったく荒唐無稽にすぎまいが、それはさておき、そもそも宗教がらみでないなら割礼は許されるのか。肉体的虐待と精神的虐待との区別はいかに正当化されるのか。次例はこの点に踏み込んだが、前提でイスラームと“女子割礼”とを不可分とする事実誤認を犯したため「おかしい」結論になってしまったもの：

「昔からの慣習の一部として“女子割礼”を必要とするようになっている社会をかえなければならぬのかもしれない。しかしそうするとイスラームの文化全体を否定しなければならないのかもしれない、前ほど強く“女子割礼”を否定するのはおかしいことかもしれないと考えるようになった。(工1年男子)。

● 何が“自然”なのか、“あたりまえ”ならばよいのか

「人権侵害だからやめろというのはどうかと思います。そういった習慣を行っている人たちが、いやなのに無理やり行っているならわかりますが、自然なこととして行っているなら人権を持ち出すのはおかしいと思います)(生資1年女子)。

「向うのかんがえも分かる(アメリカなど文明の思想を押し付けるなどという意味で)が、やはり“不自然”だと思うし、これは授業前でも変わらない)(生資1年女子)。「どうい論理であろうと、この手術は非常に不自然に思えるから[反対]」(人文文化1年女子)[自分にとって“自然”に“思える”ことが“善”となる思考!]

[割り礼を]

「フランP. ホスケンさんのこのプリントを読む限りでは、少し決め付けた様な部分もありましたが、[女子割礼を]あたりまえだと思ってやっているなんて、こわいと思いました」(生資1年女子)。「あたりまえ」とは思わず強いられているならこわくないのでしょうか、許容されるのでしょうか?ここで教育の問題がいやおうなく登場することになる。

● 性教育と社会習慣

「何も理解していない子供にそんなことをしてはいけないと思うから [割礼反対] (教育1年女子)。「割礼をしていない状態をイスラム女性 [ママ] が知らないのだから、論議の対象以前です。これは女性の不幸だ、明らかに」(人社1年男子)。「アフリカの女性は割礼をしていない国があることを知らされて居ないのがかわいそうだと思う。男性の性器も女性と同じような状態に割礼しないのがおかしい」(人文文化1年女子) [自分たちも相対的には同様に無知でありえ — 男性の割礼はお忘れの様子 —、例えば女子割礼の風習のことなど知らずにいたらそもそもこうした自分たちの反応も「議論の対象以前」だったはずなのだが、それは自分たちが「何も理解していない」証拠でも「女性の不幸」でもないのだろうか?】。

「割礼を受けている人たちが性について知ったらどのように思うだろうか。やはり割礼をするのはおかしいと思う」(工1年女子) [彼女らが“性について知ったら”、自分たちが性的快感を享受する権利を奪われ、男性によって支配されている、と思うというのだろうか?? — いささか手前勝手な感情移入から独善的な結論を独善的とはまったく思わぬままに導いた例]。「[前半同一] つまり欧米の立場から日本も同じように糾弾しているから [現地の人々がそれに反発するの] かなあとと思うが、でもやっぱり [割礼を受け入れているのは] おかしいのではないかと思う」(教育1年女子)。「外部からのお説教はおかしいと思いつつ、自分の“おかしい”と思う感覚を客観化することはできずに判断中止となった例】。

「[授業の後では] イスラムの女性はかわいそうという意識はだいたい薄れましたが、すべての女性がそれをのぞんでいるかどうかかわからないから、どの慣習にしても完全な強制ではなく選択余地を与えるべきである」(人文社会1年女子)。「少女

がわけもわからないまま行われてしまうことは問題だと思います。女性差別であると思います。たとえ本人たちが納得した上で行ったとしても、だまされているような気がします」(人文文化1年女子)。

● 宗教的規範と慣習

「[一部の裕福なひとたちを除いて]、割礼によって被害を受けている人たちのことをかんがえて、やめさせるべきだ。／たしかにヨーロッパの人たちが批判することはおかしいと思うが、宗教を越えてだめなものだめだと思う」(生資1年男子)。「陰部封鎖をしていないと、清くなく、結婚できなくて、陰部封鎖をやらざるを得ない。このことは分からなくないけれど、まさにこのような考え方などにさせてしまうのが宗教の力なのだろう」(生資1年男子)。

前者は宗教を越えて“だめなものだめ”とする価値判断のありうることを主張するが、その基礎は不問のまま。後者は逆に不条理なまでの“宗教の力”に驚いているが、どうやら、このように割礼とイスラムとの短絡的競合と誤解が学生たちの頭脳に発生した理由のひとつは、前回の講師、ナイマ・モハメッドさんが語った信仰に関する熱弁ゆえでもあるらしい。これに続く講義だったために両者の印象が癒着した面も否定しがたい。次の4例は宗教との関連を考察した例を列挙したもの。そのなかで“宗教がらみなら割礼も容認される”との立場と、逆に“宗教がらみでないからこそけしからん”、という意見との併存が見られた。2番目の例を除くと、いずれも基礎的な論理思考力の不十分さや論理の飛躍、さらには援用する根拠に対する無頓着さが気になる推論：

「女子割礼は宗教とは縁もゆかりもなく、男性支配の習俗として強制されたものであるから [廃止すべきだ] (生資1年女子)。「割礼は必ずしも宗教的なものでない分かった。性的快楽を奪うからというよりも、衛生的な面で反対」(工3年女子ほか)。「別に宗教上の理由がないので、女性割礼をおこなうのはいけないことだと思う」(工1年男子) [では反対に宗教上の理由があったら?]。「宗教とはその人々にとって最高最大のモノであり、私達がいろいろと口をつっこむ必要はない。そして正直なところわからない」(生資1年男子)。

資料Bを見て、批判意識の形成においても、
 個体発生は系統発生を辿りなおす、と考えるならば、それは錯覚だろう。つまり資料Bでは、
 論点が素朴なものから複雑になるものへと、証言を分類して配列したが、これは、一種の“発達過程”と事後的に想定される筋道とたまたま重複するにすぎないからである。あえて資料AとBで重複を厭わず論点を繰り返した部分もあるのは、決して学生たち個々人の意見形成がこうした発達過程に沿って一義的に“進化”したわけではなかったことを確認するためでもあった。たいへんに素朴でほとんど授業の効果を確認できないような意見から、ほぼこちらの誘導のとおり意識は発達させた（ないし計略に洗脳された）例まで、これら多様な反応はいずれも実際には共時的に得られた反応であったことを忘れてはなるまい。つまり一方には異質なるものを排除することをもって“善”と信ずる学生がまだ何人も残っており、他方授業の意図を汲んだ学生はほんの10名に満たなかったというのが、その実態なのである。

当初の目標とした意図とは、社会的宗教的規範の尊重と、人権なり生存権への脅威との対立のなかで、子供の権利や社会的性教育のありかたにつき、共同体の外部からいかなる発言が適切かないしは不適切か、との論点だった。この点については、授業の前後で学生の意見に異同がみられた。まずその数値を示す（表C）。

このように、授業前、“保留”の意見だったのが、授業後“女子割礼反対”へと明白に移動したのは3例でいずれも女子学生。反対に授業前には“女子割礼反対”だったものが授業後“態度保留”へと変わったのは13例、そのうち男子6、女子7。ただし、表Bの説明に記したとおり、数値のうえでの結果よりも、意見変更や変更には至らなかった箇々の理由づけのなかにこそ、学生たちの思考過程がより正確にたどれるだろう。したがって、この意見の変化の内実を、以下に引用して詳しく分析したい（資料C）。

表C：授業を通じて、“女子割礼”に対する意見は変わったか

（各個人の主観的な判断を優先しているため、細部において表A、Bの集計とは異なる部分がある）

	考えは変わらない		考えが変わった		計
	保 留	否 定	保留→否定	否定→保留	
人文 男	0	8	0	0	8
女	2	13	0	3	18
教育 男	0	0	0	0	0
女	5	16	1	3	25
生資 男	7	8	0	3	18
女	4	16	2	0	22
工 男	8	25	0	6	39
女	0	6	0	1	7
男子総計	15	41	0	6	62
女子総計	11	51	3	7	72
総 計	26	92	3	13	134

（実施日時、対象群は表A、Bに同じ）

資料C：授業後の学生の意見形成の変化
引用は「…」、[…]のなかは筆者の学生へのコメントや一般的な指摘である。

● 考えが変わった

「授業を受けて、考えが変わりました。その国のやりかたなどはその国がきめることなので、よその国の人かとやかくいうことではないし、本人がもし納得していれば[女子割礼も]、行ってよいと思う」(工1年男子) [本人の納得という“インフォームド・コンセント”を幼児にたいしていかにか設定するかの問題は、すでに資料Bで触れたとおり依然として残るはず。これとは逆の意見変更の例としては:]

「[授業前には、女子割礼が]文化であればしいたげられているとは思わない、と書いたが、こればかりは許せない。“女子割礼”は単に女性を蔑視しているだけだ」(教育1年女子) [意見はたしかに変わったがその理由づけとして思考はかえて停止した例]。

「“どうして女性だけこんなひどいことがおこなわれなければならないのか!!”と最初思っていたが、世の中の現しょうをある一面から見るとするのは危険なことだと感じました。私自身まえの授業で配布されたプリントを読むかぎりでは割礼なんてけしからん!!と思っていました、その文化圏においてはけしからんことではないのかもしれない…としました。じぶんでは断固拒否しますが、自分自身でたしかめてもないことをよい悪いというのは少し無理があります」(教育1年女子)。

「マリアム・ジャミラーさんのように[イスラームの家庭生活も西欧の生活も]どっちも知ったうえで自分で納得しているのならいいと思います」(生資1年女子)。

● マスコミによるマインド・コントロール

「意見が変わった。一方の立場からのかたよった情報を聞いていると“マインド・コントロール”されてしまうと思った。“日本人が鯨を食べる”ことと同じでその国の文化はその国にまかせなければならぬと思った」(工1年男子) [この授業そのものも、情報はすべからく、いやおうなく“マインド・コントロール”なのだが]

「イスラム社会は女性差別の社会だといったような記事を読むと、私なんかはすぐ鶴呑みにしてしまう。新聞にかかっている記事もそれだけですべてと思ってしまう。そこが問題かもしれない。物事についてはいくつかの面があって、いろいろな

角度から見に行かないと本質はみえてこない。ひとつの価値観で物事をきめることはできない。基本的に“女子割礼”そのものには反対である。しかしこの私の意志をそれを行っている人々に押し付けることはできないと思う」(生資1年女子)。

「最初は女性たちが宗教的な考えでみずから進んでやっていると思ったけど、講義を聞くにつけ、これは政府のしわざだということが分かってきた」(生資1年男子) [政府が公式の記録から女子割礼にかんする統計を隠蔽しようとし、また国際的な医療援助が手術のために流用される実態は説明したが、これはそこからいささか飛躍した“政府陰謀被害者説”]。

● 「目覚めさせるべき」なのか、固有文化と多様な価値観の尊重か

「“女子割礼”がおこなわれているとは、わたしたち第三者からみれば催眠[術]にかかっているように見える。姉妹の話で姉が妹に勇気をつけて割礼をすすめるといった話があったが、それを聞いてショックを受けた。女性自身が割礼を正当化してしまっているとは、これはもう他国から目を覚まさせてやる他ないと思う」(人文社会1年女子)。「私は割礼自体の行為には反対ですが、外からむりにやめさせる? ようなことは好ましくないような気がします。/何に対してでも、その当人が幸せであれば、何もいうことはないと思います。ひとりひとりがもっている幸せの価値というのが違うように思うから」(教育1年女子)。

「“女性割礼は廃止すべきだ”と決め付けることは、ある種の差別になるのかもしれない。それはかれらにとってひとつの文化であり、また女性の大部分は割礼を受けるのを当然だと思い、受けないのは恥ずかしいことだとさえ思っている。これは結婚する男性に対して操を立てる、という純粋な気持ちでもある」(工1年女子)。

「私達の文化や慣習を保護するのと同じようにしてイスラムの人々も自分達を保護していると考えれば、自分とイスラム女性を同一視してはならない [意味やや不明。両者の差異を尊重すべきというのか、それとも違うのだから距離を取ろうというのか?]」(人文社会1年女子)。

● そもそも差別とは何か、平等とはどういうことか

「生まれつき男女は違っている。違っているのだから違って扱うはず。「差別すべき!」もちろんそうではない。ただ違い [ママ] 角度から見、考えたら何は差別か? あまりにも判断しにくい。家庭から出て働く [ママ]。競争など参加する。かな

らず幸福とは誰も言えないはず」(教育2年女子 中国人留学生)。

「一夫多妻制の古代日本の女性の苦しみは『蜻蛉日記』にも明らかである。よい面もなくはないが… [男女が平等かどうかを論ずるのは] “バラとジャスミンが同じかどうか議論するようなもの” という [マリामの] 考え方は賛成したい。男には男の女には女なりの生まれ持った役割があると思う」(教育1年女子)。「[マリामらの発言で] 女性は男性を補充することが社会において与えられて居る役割であると考えてるのが、イスラーム女性の一般的な考え方であるというのには驚かされる。でもそういう考えを変えて行くのはとても難しいし、一概にそういう考えを悪いとはいえない。国民性の違いというのをとても強く感じる」(人文文化1年女子)。

● 西欧的価値観を刷り込まれた自分への疑問

「イスラーム、中東を見るわたしたちの見方は欧米式であって、それを押し付けるのはよくないと思った」(工1年男子、人文文化1年女子)。「ホスケンレポートについて、自分が欧米側の立場でよんでいたことに気付いた」(教育1年女子)。「女子割礼は日本ではみられないので、知らず知らずひとつ上の方から見下して批判しているのに気がついた。いちがいに反対できない、と意見が変わった」(教育1年女子)。「知らないうちに西洋を肯定し東洋を否定する心の中の動きを見たような気がして何もいえなかった」(人文社会1年女子)。

「西洋の“考え”は近代的で優であり、東洋の“考え”は原始的で劣というイメージがはびこっていると思う。アフリカの女性の割礼を女性差別問題の内では東洋の“考え”を西洋の“考え”が差別視しているということも感じられる(…)ひとりひとりの価値観が違っているのに西洋的な価値観といわれるものですべてを覆ってしまうのは、何か変だと思う」(人文社会1年女子)。

「自分を欧米の立場と同一視していた。自分の国とは違うから差別していたのだ。“女性差別をなくそう”とって運動を起こしてみても、これは本当にいいことなのであろうかと、疑問が沸いてくるようになった」(生資1年女子)。

「いままでは私は西洋式の男女平等が先進的で正しいものと思っていたけど、それは誤り [ママ] で、西欧の男女平等は西洋の文化のひとつであるだけにすぎないことを知ってショックを受けた。そしてますます異文化圏のことを考える難しさを感じた」(人文文化1年女子)。

「[最初から態度保留だったが] 考えは変わりません。ホスケン・レポートはやはり西洋の方が進

んでいて、中東・アフリカは遅れている…と見ていることが確信できた。ある社会のものが他社会を見て“差別だ”ということができるだろうか、疑問に思う」(教育1年女子)。

「基本的には絶対反対の立場を採りたいのだが、まったく違う国の話であるので、その国の人がそれ程不満をもっていないのであれば、周囲からとやかく言う問題ではないのかもしれない」(人文社会4年女子)。

● “二重差別”

「割礼をしている国がしていない国に差別される、つまり差別のある社会が差別のない社会に差別を受けるといふ二重の差別があるのは、許されないことだが、やはり私はその社会独自のものとせよ、割礼には反対で意見はかわらない」(教育1年女子)。

「差別反対を訴えることが差別になっていることもあるなど、表面上自分の文化、考えと違うものを、簡単に批判すべきではないと思いました。思慮深い人になることをめざそう」(生資1年男子)。

● 自家中毒症候群的批判

「マリाम・ジャラミーの意見に対してイスラームの感覚を否定するつもりはないが、賛成しかねる、一夫多妻ならどうかと思う [ジャラミーの文章は一夫多妻肯定論のはずだが…] /ラズワーク夫人。女子割礼反対というのは一方の文化からの反対なのでもっと問題の土地の意見を取り入れるべきだとおもう [とスーダン人の立場から西欧の N. G. O. を批判しているのが、ほかでもないこのラズワーク夫人ご本人のはずなのだが…] /ホスケン・レポート。割礼廃止を目的としているが、道徳的価値感 [ママ] がちがうので、何かおかしいと思う。西欧の意識を押し付けようとしているように感じる」(工3年男子)。

「組織的に各論者の論点を復唱していながら、鏡よろしくまさにその復唱する論点でもって当の論者ひとりひとりにケチをつける奇態な論法。自分の「意識を一方向的に押し付ける」この学生の論法は、その日本語読解力が「何かおかしいと思う」のだが。また同氏は授業後「割礼反対」の理由を変えたが、その理由として曰く：]

「[反対する理由は] 女性からオルガリズム [ママ] を奪うから。自分はいままでこれをする事によってよけいに快感が増すとおもっていただけにショックだった」 [これは、さまざまな知識が不思議な刷り込みをされた特異例として出色の出来]。

● 部外者の無力感

「アフリカ、イスラームの女性は差別を受けている、

かわいそうと外国人が反対しても当の本人が「これが当たり前」と考えを受け入れなければどうしようもありません。無理に手術などせず、自然のままの姿であることが一番よいということをだれかが教育するしかありません。女性の性的快感の問題は男性にはひとごとであって、理解できないことなので、女性がたちあがるしかないと思います」(教育2年女子)。

「これに真険 [ママ] に取り組まなければならないと思う。でもこんなに離れて住んで居る僕たちにとって、いったい何ができるのだろうか？」(生資1年男子)。

「西洋の人々はやたらに性欲がどうのと主張していますが、はたしてそれが正しいことなのかといえば、正しいとはいえないと思います。割礼をしている国々の人々はその人達りの考えがあって、どれが良いのか悪いのかは私達が判断できる問題だとは思いません。ただ保健の問題上いいことでないことぐらいは私にも分かります。でもやっぱり割礼は無くすべきだと思います」(教育1年女子)。

「ホスケン・レポートを再考して：例えば性欲についての事実について西欧では確かにキンゼイなどの人々が立証したかもしれないが、文化が違い昔からの慣習を守ってきた人々がいきなりその証明を説明されても、はいそうですかとすぐ信用できるだろうか？彼らも完全な誤りを信じてきたのではなく、何らかの利があってそれを信用してきたのだから、その辺りをもっと理解すべきだと思う」(生資1年男子)。

「私は犬猫などの去勢を思い出しました。私たちが今犬猫を去勢することと同じようにアフリカで女性の割礼を行っているのかなと思いました。ただ違う点として犬猫は去勢されることを当然とは考えていないのに、アフリカの女性は割礼されないということは恥だと感じる点です。／「習慣だから」と言われてしまったら、部外者が何といっても仕方ないような気がします」(教育1年女子)

「彼女らが昔から言い伝えられていることを心底疑わずに行っているのなら、何をいっても無駄なのかもしれないと思いました」(教育1年女子)。

「われわれは自分の社会構成によって、他の社会を変化させ、文化、信仰まで変えようとする [の] は、私は賛成と思わない」(教育2年女子 中国留学生)。

● “オリエンタリズム”を越えた批評の可能性と限界

「欧米の人びとがイスラムの文化にいちゃもんを

つけるというのはよくないと思う。欧米の人権の考えとイスラムの人権の考え方というのは、違って当然だと思うし、押し付けてはいけないと思う。しかし医学的によくないものであれば、時間をかけてよくなる方向に教育すればわかってくると思う」(人文1年男子)。

「文化の違いだと言い切るのは、一種あきらめのような響きがある。(…) 実際変えていたほうが良いのに変わらないものは私達の身の回りにもたくさんある。だから文化とか人種とかそういう観点ではなく、女性としてかんがえてみると、私はこの制度はやめるべきだと思うから、少し迷ったが、あえて反対した」(生資1年女子) [文化を越えて“女性”としての連帯を訴えるのも、かつてよくあった戦術…]。

「私は男ですので女性の立場や身上においてこの問題を考えることはできませんね」(生資1年男子) [マイノリティーなり劣悪な状況にある者にたいして優位にあると見なされる立場からは批判をさし挟むのを控えなければならない、という北米の politically correct の学生版。ただしこれには理解不能なる者のゲッター化と孤立化の危険も裏腹だろう]。

「先進国の人々が、他の国家の女性の立場に首をつっこむ権利があるかなどという議論があるそうだが、人間はみな平等とみとめられているなら、平等の立場から国や民族を越えて口を挟むことは可能だと思う」(生資1年男子) [こちらは“人類”としての連帯宣言。あいにくインドでもイスラームでもこうは参るまいが]。

● 自分の無知に気付く

「“自分はなんと世界を知らないのか”という思い。「ホスケン・レポート」を鵜呑みにしてよいかどうかはよく考えなければならない。アフリカやイスラム圏を“女性差別社会”として差別しているということもありえるし、世界を知らないということがこんなにも文化摩擦を激化させるものとは思ってもよらず、危機感を感じた」(工1年女子)。「自分が意見を言うには知織 [ママ] も経験も足りなさすぎる」。「もっとくわしく調べないと分からない」(工1年男子)。「やはりまだよく理解できない」(生資1年女子)。

● わからなくなった

「外の文化にたいして批評するためには、自分の文化だけでなく相手の文化からの視点でみなければ何も解決しない。割礼も良いか悪いかわからなくなってしまった」(生資1年男子)。

資料C

資料Cの分析から結論として指摘すべきことは、教育と個人の自由との関係にある根本的な矛盾が、女子割礼という具体例を通じて学生たちにも意識されてきたことだろう。それを3点にまとめれば、(1)まず啓蒙と科学の逆説とでも称すべき現象、(2)つぎに相対主義の陥穽とでも呼ぶべき事態、(3)最後にボーダレスの時代における多元的な価値観の狭間における個人と共同体、そこでの教育の可能性、危険性と限界、とでも言うべき問題だろう。いずれもやや手垢はつきながら、容易に根本的な解決など得られない難題である。それぞれ敷衍しておこう。

啓蒙と科学の逆説

(1)まず女子割礼の風習は現地の女性の無知や宗教的・習慣的強制への一方的服従、さらにはそれが母から娘へ姉から妹へと集団的催眠術のようにして伝播している、という見方をした学生がある。(2)こうした見解をとる学生のおおくは教育によって迷妄状態から啓蒙しなければならぬ、との主張をもち、その根拠として割礼に科学的根拠のないことを指摘する。だがここで見落とされていることは、むしろ“科学”であるはずの“医学”が“迷信”なはずの“女子割礼”の手段として活用され、習慣の強化にむしろ一役買っているという、現地の状況である。

科学すなわち善すなわち啓蒙という素朴な図式からまだ多くの学生が抜け出せていないのは、日本という社会の常識や高校までの学習の成果というべきか、逆効果というべきか、にわかには結論を下せまい。ただここから判明するのは(3)このような意見が出て来る程度には、大学1年生たちは、日本における常識や教育による“信仰”に、かれら自身知らぬ間に服従させられ、それが集団的催眠術として機能している、という明確な事実であり、またそうした mind control に自分たち自身洗脳されているが、そのことに気付いていない、という点では、女子割礼を行っている女性たちと自分たちも何ら異なるところがない、という認識であるはずだ。だがもちろんこうした認識にいたった学生はひとりとして見られない。

相対主義の陥穽

ものごとの判断基準としては自分たちの常識に頼りながら、他の社会の常識は拒絶するという自分たちの態度に、無意識のうちの異文化蔑視が働いていたことには、多くの学生が気がついた。昨年はいくつかの認識に至った学生すらほぼ皆無であったから、こうした懐疑意識を学生に植え付けえたことは評価されよう。もちろん究極的にこうした問題意識をもったほうが幸福かどうかは分からないことであって、それはまさに“女子割礼”についても、“正しい知識”を授けることで問題が解決するわけではないのと同様なのだけれども。

とにかく、学生たち自身が強く認識したことは(1)自分たちが知らぬ間に西欧の人権意識などを無前提のまま鵜呑みにしており、(2)またそうした西欧の価値観をいつのまにか自分たちの内なる絶対の真理であったかのように内面化して根付かせており、(3)その視点からアフリカやイスラーム圏での生活を見下す行為になんら疑問を感じず、むしろそうした隠された差別意識が、女子割礼のようなセンセーショナルな話題に接すると、生理的な反応もあってか、脆くも地金を晒して露呈し、情緒的な攻撃の姿勢へと短絡して表出される傾向を呈すること、である。

だがここまでの認識が得られたからといって、その先どのように判断を進めればよいのかは一挙に不透明になる。このあたりから学生たちの見解も錯綜してくる。人権の問題は西欧の価値観だから外の世界に当てはめるのは不当だ、という意見もあれば、いや西欧のものだからおかしいとする見解そのものがおかしい、いかに西欧の価値観といえども正しいものは正しい、とする判断もある。だがその根拠はどこにあるのか。また人権の思想が正しいとしてもそれを女子割礼を続けている社会にたいして押し付けるべきなのか、かれら自身が気付くのに任せるべきなのか。また宗教的権威のもとで一定の社会の価値観を担っている風習を、迷信だとして否定する権限が誰にあるのか。宗教と人権思想が対立した場合どちらに優先権があるのか、またその判断の根拠は誰に、どこにあり、また自分

がどのような立場にあれば、いかにしてそのことを承認できたり、できなかったするのか。

多元的価値観のなかの個人、共同体、そして教育
 “女子割礼”は「文化だからしょうがない」という意見もあれば「こんなのは文化とはいえない」という決め付けもあった。「不自然だからやめるべきだ」という意見と「住民が自然だと思っているのだからとやかくいうことはない」と、それが“自然”がどうかでも意見は分かれた。自分の“自然”を相手構わず適用しようとする立場と、反対に相手側の“自然”を尊重する立場とでは、“自然”そのものも大きく異なるが、いずれにせよ“自然”かどうかを評価の基準とする思考慣習にも、超越的な理性による一神教的風土とは異なる文化の反映は容易に認められよう。そこには“文化”とは定義として“自然”と対峙するものだ、とする西欧の思考のもっとも基本的な枠組みにすら習熟しないまま、西欧的と称される価値観に浸ったつもりでいる日本の文化の（西欧から見た場合の）不徹底性、浅薄な擬態の様も露呈している。女子割礼をはじめとする通過儀礼はまさに人間たちに自分たちが自然とは違うことを教え込む過程だったはずだ。そしてまたすべての社会的な規範は、それがあたかも第二の自然のように、社会のなかで個人の人々の肉体や精神のうえに植え付けられ、そこに内面化され同化されることで、はじめて十分な効果を発揮しはじめる。

西欧の社会の膚に縫い込まれ、魂に染み付いた価値観のありかたを多元的な価値観のなかで把握しなおした学生もあった。女性の隷属からの解放というスローガンそのものが、視点を変えると西欧的価値を押し付ける文化帝国主義とも見えかねない、という論点に何人かの学生は気付いた様子だ。人間が社会化される過程で通過する儀礼はいずれにせよ肉体的・精神的な苦痛や変形をとまなうものだが、それを虐待として犯罪視する根拠を通文化的に設定することがほんとうに可能なのだろうか。教育そのものが絶対の真理への開眼への道程であるどころか、個人の社会へ適応を目的とした、最も非暴力的

にみえるがゆえに実は最も隠微で執拗な精神的暴行にほかならないのだとすれば。いわゆる後進国における教育の遅れや幼児にたいする非人間的な扱いを批判しながら、同時にそこに文明に汚されていない無垢なる心を発見しようとするような、屈曲し、矛盾した傾向にも、教育、躰というものの本質的に抑圧的な性格と、その性格に汚染されたがゆえに成功した抑圧形成の典型的な結果というべき反応を容易に探知することができよう。

こうしたのっぴきならない問いは、とりわけ価値観を共有しない異文化のあいだで一方が他方の社会風習などを観察し、自分の価値観では到底許容できないような事例に直面した場合に顕在化する。とりわけ性教育に関連する話題の場合、この発現は複雑となる。まず第一に、教育の過程そのものがある抑圧をいやおうなく伴う不可逆的な過程だからであり、第二にここでは啓蒙そのものが一種の麻酔装置としても働いているからである。その結果、異文化に対する我々の側からの反応の中で、我々の文化において教育や躰を通じて抑圧されたものが再来して噴出する場合も多くない。ただしそうした抑圧されたものの再来も、噴出のおりにはそれなりに成型され、昇華される。とりわけ異文化に対して発言される場合には、女性ならば理解できる筈だ、といった連帯意識の勧誘や、人類である以上共有されるべき価値観の表明、といった高邁な体裁を整えて登場することが多いのだろう。

“女子割礼”という話題にたいする学生たちの反応の混乱ぶりは、この国の性教育や思考訓練教育においてなお未解決のまま放置されてきた多くの問題が、異文化理解という枠組みで一気に吹き出る様子を伝えている。資料 A, B, C はその現場を物語る資料として、なおいろいろな視点からの分析に利用しうるものと考えらる。

IV なお残る問題

IV-1 学生たちの意見にみられる3つの弱点

不
真
の

以上あるいは一見不必要なまでに長々と学生たちの意見を引用してきたのはほかでもない。学生たちの見せる論理の破綻や脆弱さ、それを許す暗黙の前提といったものに、日本の教育のみならず社会の現在おかれている状況が露呈しているからである。本稿の意図はもとより「女子割礼」という問題にたいして日本の大学生たちが取るべき理想的な意見などといったものを呈示することにはない。また学生たちの知的反省の程度の限界を露呈させようとする露悪的な趣味とも無縁である。前者を目的とするならば、もっと引用の枝葉を切り詰め、元の文脈から引き剥がして再分類のうえ、論旨に照らして密度の高い論述に铸直せば、平凡な学術論文一本をなすことなどいたって容易だったであろう。また後者に必要な材料にもすでに以上の引用群で事欠くまいが、なにもそれは「良いレポートの書き方」といったマニュアルに乗せるべき添削例を列挙したわけでもなければ、日本の大学の知的活動の末期的現状に悲憤慷慨するための材料を示したのでもない。学生の達成不全を啜う教官の姿勢そのものに、「女子割礼」の風習ある社会を蔑視する学生の態度と相似であるのみならず、その原器をなすような、屈曲した優越感が潜んでもいよう。

学生たちの反応のなかで、日本の教育のありかたがじかに反映していると如実に感じられるのは、といわけ以下の3点だろう。つまりまず、(1)「人権」、「平等」、「差別」といった用語の意味を吟味しなおす哲学的な訓練の欠如。(2) 異質な価値観に対する生理的な拒絶反応を善悪の判断と短絡させる傾向、そして(3)情緒的な反応を書き付けることで自足し、そのため自分の責任で何らかの論を立てるといった姿勢の欠如。

IV-1-1: レッテルへの批判精神の欠如

第1点については、これは教科書から新聞マスコミまで共通した現象ではあろうが、あらかじめ「善」や「悪」とみなされるレッテルを貼り付ける決め付けが、事実認識の努力に優先し、ところが一度レッテルが貼られると、そのレッテルが善悪判断の客観的な基準になりかわり、

これにしたがって事態の善悪がそれこそ一方的に判断され断罪される、という転倒が発生する。「公害」といえば不特定多数の原因によって不特定多数の市民に害悪がなされる場合であろうが、あきらかに特定の企業の利益追求ゆえに引き起こされた「私害」ですら、あれは「私害」などと指摘すると、お前はあれを「公害」と認定しないつもりか、とほかでもない被害者同盟から吊し上げにされる。「談合」というのも、つい数年前までは、日本的な社会規範として容認され、国内産業の保護育成のためとして支持されてきた紛争回避手段であり不平等排除の安全装置であったはずなのに、それが円高がらみのバブル経済の下で本来のホメオスタシス機構を失い、さらには海外(とりわけアメリカ合衆国)から、非関税文化障壁だとして批判を受け、「外圧」に晒されるや、いつしか「談合即悪」という図式が世間に蔓延し、マスコミはその摘発によって「庶民」とともに正義の味方となって溜飲を下げる、という体質。

IV-1-2 異質なもののへの生理的嫌悪と価値判断の混同

第2の傾向もこうした経済状況の変貌と並行した変化でもあろうが、かつて舶来といえは思想であれ商品であれ高級品として手放しに歓迎していた風潮から冷めて、日本の産業が世界でもっとも信頼できるとの神話が短い期間ではあったが行き渡り、逆に外国からの輸出品は税関での入念な品質検査を経ているがゆえに殺菌され無害なかたちで日本の市場に出回るといった図式が成り立ち、外国に家族ぐるみで出張しても子女を現地の日本人学校に入れないと将来が不安だという心理が一般的になるや、日本の流儀が通用しない文化圏に対する生理的な忌避感、敬遠ならぬ隠された軽蔑ゆえの拒絶意識が、おりから急増した外国人へのいわれなき不安感や不穏感とも相乗して、日本における日常生活での取るに足りない局面で、それとなくなれば無意識のうちに、しかしそれだけ執拗に露呈するようになってきた。日本流とは異質な価値観に対するこうした生理的な拒絶反応がすぐさま善悪

の判断と短絡される傾向は、社会学者にいわせると、とりわけここ1-2年若い世代に顕著になってきたとのことで、そこにはむしろ好き嫌いの判断が善悪の判断に優先し、これを規定するという転倒まで発生しているといわれる。

IV-1-3 意見形成と感想吐露との未分化

第3点はこうした傾向の延長上に容易に想定できる。すなわち情緒的な反応を書き付けることで自足するような風潮のみならず教育が、小学校以来なされているからである。国語における読書感想文中心の指導がその最たるものだろう。「正直に思ったとおりの感想を書く」という指導は、一見児童の情操と感受性を自由に発達させるかにみえて、実際には教育や評価の場において肯定的に受け入れられそうな最適条件をいわば直観的に探しとめるような性向を児童生徒たちにそれとは明言されることもないまま植え付けてゆく。自分の責任で何らかの論を立てることによって、周囲と対立する愚を犯すよりは、むしろ多数派の意見を上手に情緒的に代弁したほうが社会的行動規範にも合致することを、日本の公教育を通じて児童生徒たちは学び、躰けられてゆく。

これは大人たちの世界でも同様であって、論理をもってなんらかの理由づけを声高に弁じたのではかえって同僚から嫌われ、むしろ根回して土俵を前以て適切かつ都合に準備し、設定したうえで、その場になればもはや、「やはり」とか、「言うまでもなく」とか「明らかに」といえばそれで十分で、その場のだれもが、やはり言うまでもなくその主張は明らかだと頷き、また反対意見をもっていても到底そうとは発言できないような雰囲気あたりが溢れている、という状況を自ら作り出して、人心を掌握した側に「正義」が下る。この国のこうした文化条件に、学生たちの反応もまた見事なまでに対応している。

V-2 社会順応のための教育か通念打破のための教育か

これら3点、いずれも日本的な倫理の気分や、

調和をもって善となす共同体的なぬるま湯に漬かっているかぎり、むしろ美德とされ、学校教育でも推奨され褒められこそせよ、おそらく決して咎めだてされることはなかったであろう生活態度であろう。だが、こと異文化との価値観の対応を迫られる局面では、こうした行動様式がかえって異質な思考を感覚的に排斥する独善的な居直りないしは、理不尽な拒絶の姿勢へと容易に後退しうる。通話努力の放棄や、はなから相手にしない対話回避の姿勢が、本人にとってこそ謙譲の表現のつもりがかえって高飛車な無視とも映じかねず、誤解を解消しないどころか却って別次元の誤解の種を蒔き、手続きとしての信頼性を失う結果、相手側にも感情的な反発を招き、事態をなおさら錯綜させるといった悪循環を招くことが少なくないのは、こうした異文化間の交渉で日本人代表者の通訳などといった仕事をしたことのあるほどの者なら、だれしも日常的に経験し、そこに日本流教育の限界と問題点を意識したことだろう。

こうした見えざる枠を取り払うことは、日本に住む以上もとより無理な相談であるばかりか、一見不必要で逆効果だとすら映るが、しかし少なくともそうした枠が外部との付き合いのなかでは、ふだん目に見えないだけに一層強力な障害となりうることを、具体的な案件を通じて理解してもらうことだけは必要ではあるまいか。外なる世界を理解しようとしても高校までの教科書の正解の暗記のように参らない、という実感、自分の誠意と善意さえ信じればすべてはうまくゆくはずだといった楽観的な予定調和では到底渡れない現実の複雑さ、理解することがもはや何らかの目的達成の手段ではなく、そのものとして永遠に追い求めてゆくほかない目標であることへの自覚。あるいは安易に理解できるはずだとする前提を掘り崩される切実な体験から、言葉だけで平等とか差別反対とか人権侵害とか唱えてみてもそれだけでは無意味だけでなく、かえって現実をたいして思いもかけぬ副作用をさえ及ぼしかねず、またそうした一見きれいごとの模範答案の裏にいかなる問題が潜んでいるかを読み取り、分析するだけの知

性を養い、より懐の深い判断力を練る訓練。もはや正解のありえない世界の中でいかに対処し、自分の選んだ行動に責任を取ってゆく必要があるのか。
 (どのように)

あまりに当たり前で初歩的すぎることから、だからこそ(研究の場では無論、教育の現場でも)蔑ろにされてきた、こうした訓練の機会として、今回の授業が十分な成果を上げたとはまだ到底考えられない。学生たちの反応も、いまのところ以下のようなやや懐疑精神に捕らわれた意識と、ある意味では健全な、だがいささか悲観的な不可知論、不能感へと導かれるほかなかったからである。

「これから国際人としてつきあってゆく中で、その国によっていろんな常識があって、自分の常識の通用しない時もちろんあるのだ、ということが分かった」(教育1年女子)。

「日本と全然違う社会のことを理解することはほとんどできなかったが、これからの勉強でより深く理解できればと思う。でもやはり本質的に知ることは不可能なのではないか」(人文社会1年男子)。

「外部から見ただけでは実際のことは分からず意見できない。人が人の差別を差別することはできない」(生物資源1年男子)。

IV-3 制度と態度との隙間(マージン)としての教育の可能性

そのなかでひとつ次のような意見がみられた。「今回の講義を聞いて、女子割礼をしていない女性を、汚いだとか不純だとか決め付けてしまい、距離をおいてしまうのは、宗教上の事であり、我々日本人程宗教に無関心な国民が、宗教に熱心な国の人々についての賛否は答えられないから、[先の授業前の質問では]態度は保留したが、その態度は賛成できないと思う」(工1年男子)。

一読して、これはたいへんな自己懐疑の結論だ、と思った。つまり、態度保留と書かざるを得なかった自分の態度を指して、そうした自分の態度に賛成できない、という複雑な心境を屈曲した文体に託したのか、と一読思ったからで

ある。それにしては女子割礼を宗教儀礼と混同しているのは、初歩的な誤謬である。また他者の宗教に信者ではない立場から賛成反対を表明することはできない、という断定も本来なら疑問に付されてしかるべきでもあろう。これもまた、「汝の欲するところを他人にも施せ」とする『聖書』の積極性とは違って「自らの欲せざるところを人にもまた為すなかれ」という儒教の消極性に知らず知らず裏打ちされた価値観への拘束性の証拠である。これはいまひとつひねれば、湾岸で戦争とあれば出掛けて行って火消しをせねば世界正義に悖ると考えるアメリカ合衆国国民の「火消し根性」と、その逆に外圧に晒されるや、内部の問題の揉み消しに奔走して体面を繕い(“談合”告発!)、内部に引責自殺を引き起こすことで、矛盾を相殺し、もって世界の予定調和に消極的に貢献をしようとする日本的世界観の映し鏡なのかもしれない。

ところが、この回答、実は3名の学生が同一の感想を写しあいこして提出したものの一枚だった。もうひとりの回答をみると、上の引用で「その態度は賛成できない」とあったところだけ、「その制度は賛成できないと思う」と微妙に、だが決定的に違っている。こちらでは、非イスラームとしてイスラームの宗教的慣習(だったとして)については賛否を言う立場にはないが、だがしかしこの宗教「制度には賛成できない」と、解釈は明白でいかなる曖昧さも含まない。だがこれでは上に戯画的に示した“日本人学生の欠点”まるだしであって、理由不明で理論的一貫性の欠如した、飛躍した主観的意見を言わばなしにしたにすぎない。

改めて最初の引用を読み直すと、どうやら最初の解釈は当方の誤解なのだろう。学生はなにも異文化における一風習にたいして自分の意見を表明することを保留せざるを得ない自分自身の「態度は賛成できない」などと複雑なことを述べているわけではなく、ただたんに、割礼を容認している社会「制度は賛成できない」と言いたかったのを、書き違えて「制度」のかわりに「態度」としただけなのだろう。

ここでいまさら他者理解に関する精緻な哲学

的議論を展開しようとは思わない。「他者」は理解できないとの了解を人々が共有したとき——そしてこの思い込みの共有が独我論だが——そのときもはやその「他者」は存在しないのだし、また自分と他人とは相容れないのだというとき、両者が相容れないことを証明するには両者を比較する枠組みは最低共有されていることになり、そのかぎりではもはや両者相容れないとの主張そのものがその根拠のいくぶんかを失っている。複数性を許す寛容さとその地盤となる共通なる土台との貂ごっこのなかでは、理解ある態度こそかえって慇懃無礼で恩着せがましい策略をなす危険性をもつことにすら、とりわけ日本で教育された人間は用心せねばなるまい。日本社会のこの物分かりのよさが、海外での信頼の欠落とも表裏一体なのだから。

ただこの文脈で学生の意見に対する誤読の例をあえて呈示したのは、それがかりに言い損ないや文章鍛練の未熟ゆえであったとしても、外からの刺激を受けて、ふだん慣性的に当然としている思考回路に断絶と混乱とがもちこまれ、外部と内部との相互乗り入れとでも呼ぶべき事態が、これ以外には述べようがなかったらしい海浜で錯綜したテキストの表面に、かならずしもそれとは自覚されないまでも、発生しているかのように伺えるからである。「制度」と「態度」の違い、という一見取るに足らない言い損じ(キプロコ)に、ひょっとすれば異文化理解と誤解に関する重大な態度決定の差が、まさに撞着論法(オクシモロン)の交差(キアスム)という形態をとって、いわば問題の提喻(シネクドート)として露呈しているのかもしれない。

複数の制度の織り成す間隙と重畳とのマージンの「遊び」のあいだで揉まれながら、その摩擦にたえて摩擦を緩和することに利鞘を見いだす態度。それを学生たちに思考訓練として求めることは、決して荒唐無稽な要求ではないだろう。

1994年11月20-28日